

令和 5 年 5 月 18 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12285

研究課題名（和文）出産体験の振り返りアセスメントツールを用いた看護介入モデル考案のための基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study for Designing a Nursing Intervention Model Using the Assessment Tool for Reflection on Childbirth Experience

研究代表者

國清 恭子（Kunikiyo, Kyoko）

群馬大学・大学院保健学研究科・准教授

研究者番号：90334101

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：出産体験の振り返りの支援の必要性についての認識が高まっている一方、出産体験のアセスメントや支援方法に対し困難感を抱く看護師は少なくない。そこで、出産体験の振り返りの支援に活用できる「出産体験の振り返りアセスメントツール」を開発するとともに、本ツールを用いた看護介入モデルの考案に向けて、支援を実践する際の困難や課題の実態調査を踏まえ本ツールの実用性を検討した。その結果、本ツールは出産体験の振り返りの支援に必要な側面を効率的にとらえて支援に活かすことができるという実用性を備えており、本ツールの活用により支援における困難感を軽減し、支援の実践力を向上できる可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発した出産体験の振り返りアセスメントツールは、これまで開発されている出産体験に関する尺度と一線を画し、臨床現場における支援に活用することを明確に打ち出したツールであり、看護師の経験によらない一定のアセスメント視点を提示し看護介入モデルの考案に貢献する点が学術的な意義をもつ。また、多くの看護師が出産体験の振り返りの支援を実践できることにより、産後の母親のメンタルヘルスを保ち、母親意識の発達を促進することに繋がることが社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：While there is growing recognition of the need to support reflection on the childbirth experience, many nurses face difficulties in assessing and supporting the childbirth experience. Therefore, we developed an "Assessment Tool for Reflection on Childbirth Experience" that can be used to support reflection on the childbirth experience. Furthermore, in order to design a nursing intervention model using the tool, we examined the practicality of the tool by carrying out a survey on the difficulties and problems encountered in providing support. The results suggested that the tool has the ability to efficiently capture the issues necessary to support reflection on the childbirth experience and apply them. It is also believed that the tool has the potential to reduce the sense of difficulty in support and improve the practical ability to provide support.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：出産体験の振り返り アセスメントツール 介入モデル 実用性

## 1. 研究開始当初の背景

出産体験は、産褥期の母親の心理的健康や母親意識の発達に影響を及ぼすことが明らかにされており、メディアでは“お産トラウマ”などのテーマで取り上げられ、一般においても出産体験による心の傷つきの存在が認知されてきている。出産体験の臨床的な意義<sup>1)</sup>として、出産体験を自分なりに受け入れられないと、母親としての自分を受容できず、子どもへの否定的感情を抱くことがある、出産体験による否定的感情は、産後うつなど心理的不健康な状態に移行することがある、例え否定的に受け止められている体験であっても産後に再構築するチャンスがある、という3つが指摘されている。このような背景から、臨床現場においても母親の出産体験のとらえ方をアセスメントする必要性や、出産体験を振り返り、意味づけを促す支援の必要性が認識されてきた。そして、母親の語りを傾聴する形で、母親自身が自分の出産体験を思い起こし、感情を表出・整理し、意味を見出すことをサポートするという支援が行われている。

しかし、実際に支援する看護者からは、「どのように話を聞いていけばよいかわからない」などの声がかかれ、出産体験の振り返りに関するアセスメントやメンタルヘルスケアの実践に困難感、課題を抱えている実態がある。出産体験の心理的ケアに関する先行研究を概観すると、支援の足掛かりとなる出産体験のとらえ方をアセスメントする視点を提供する研究<sup>2)</sup>や、有効性まで検証した具体的な支援方法を提供する研究はわずかであり、臨床現場で広く活用されるに至っていない。また、国内外に出産体験に関する既存尺度はあるが、臨床現場における支援の際にアセスメントに活用するには課題が存在していた。そこで、筆者は臨床現場における出産体験の振り返りの支援に活用できるアセスメントツールの開発に着手した。

開発するアセスメントツールを臨床で活用される実用的なツールとするには、ツールの存在を広く認知してもらい、実際に使用した人から分かりやすさや使用に対する心理的ハードルの有無などの具体的な反応を得て改良することが不可欠である。さらに、アセスメントツールの使用をきっかけとして具体的で効果的な看護介入につなげることが本来の目的であるため、単にアセスメントツール使用の有無や頻度という側面の普及ではなく、実際の支援場面でのアセスメントツールを用いた看護介入の効果を検証することも必要である。しかし、前述のように出産体験の振り返りおよび意味づけの援助に困難感を持っている看護者は多く存在し、現状は単にアセスメントツールを提供するだけでは効果的な支援につながらない可能性が高いと予測される。アセスメントツール自体の紹介にとどまらず、アセスメントツールを用いた出産体験のアセスメントとそれに対応した支援を実践するための看護介入モデルを提示することが必要である。そこで、アセスメントツール普及に向けた最初の取組みとして、アセスメントツールを用いた出産体験の振り返りの支援を実践するための看護介入モデルの考案にむけた基盤となる研究が必要であると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、開発を進めている出産体験の振り返りの支援に活用できるアセスメントツールを用いた効果的な支援を実践するための看護介入モデルの考案にむけた基礎的研究を行うことを目的とした。具体的には、看護介入モデルの考案に向けて、出産体験の振り返りアセスメントツールの実用性を明らかにすることとした。

## 3. 研究の方法

### 1) 研究1：出産体験の振り返りアセスメントツールの開発と信頼性・妥当性の検討

- (1) 対象：A県内の分娩取扱い施設で調査協力の同意を得た15施設にて経膈分娩または帝王切開にて生児を出産した精神疾患の既往や現病歴のない産褥入院中の褥婦2,495人を対象とした。
- (2) 調査内容および調査方法：調査内容は属性(一般背景および出産体験に関連する分娩時の情報)と出産体験の振り返りアセスメントツール試作版とし、無記名自記式質問紙調査を行った。
- (3) 分析方法：属性および試作版について記述統計量の算出、主成分分析および質的精選を用いた試作版の項目精選、Cronbachの係数を算出によるアセスメントツールの信頼性の検討、主成分分析により見出されたアセスメント視点と既存尺度の構成概念の照合による妥当性の検討を行った。なお、質問紙を回収した1,615人のうち、有効回答1,315人のデータを分析した。
- (4) 倫理的配慮：群馬大学人を対象とする医学系研究倫理審査委員会、また必要に応じて調査協力施設内の倫理審査委員会の承認を得て調査を実施した。

### 2) 研究2：出産体験の振り返りアセスメントツールの実用性の検討に向けた基礎的調査【助産師対象の質問紙調査】

出産体験の振り返りの支援について、実際に臨床現場の助産師はどのようにとらえ、どのような困難や疑問を持っているのかを明らかにすることを目的とし、研究者が実施する出産体験の

振り返りの支援に関する勉強会を開催したA県内の地域周産期母子医療センター3施設に勤務する助産師を対象に、「出産体験を聴く、振り返りの支援をすることについてのイメージ」「出産体験の振り返りの支援をする際に困ったことや難しかったこと」「出産体験の振り返りの支援について学びたいこと」について、無記名自記式質問紙調査を行った。回答があった58人のデータを意味内容の類似性に従って分類し質的帰納的に分析した。

### 3) 研究3：出産体験の振り返りアセスメントツールの実用性の検討に向けた基礎的調査【ベテラン助産師対象の面接調査】

出産体験の振り返り支援における助産師の経験知を明らかにすることを目的に、A大学大学院で出産体験に関する理論を学んだ大学院生もしくは修了生4名を対象に、支援の目的・方法、支援のコツ、支援を通して大切にしていること、支援を通しての学びについて半構成的面接調査を行った。面接内容より逐語録を作成し、Berelson.Bの内容分析を用いて分析した。B大学看護学専攻の疫学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

### 4) 研究4：出産体験の振り返りアセスメントツールの実用性の検討に向けた基礎的調査【若手助産師対象の面接調査～パイロットスタディ～】

出産体験に関する理論や支援の方法についての知識を持つ看護師が振り返りの支援を実践する上での課題の実態を明らかにすることを目的に、B大学助産師コース在学中に出産体験の血論や支援方法を学び、出産体験の振り返りの支援が定着している施設に勤務する卒後1年目の助産師2名に、実際の振り返りの支援において困った・難しいと感じていることについて、出産体験の振り返りアセスメントツールを使用することで予想されるメリットや期待について半構成的面接調査を行った。

## 4. 研究成果

### 1) 研究1：出産体験の振り返りアセスメントツールの開発と信頼性・妥当性の検討

主成分分析と項目の質的精選の結果、最終的に2つの主成分からなる28項目を選定した。さらに、各主成分について含まれる項目について、内容の類似性に従って分類し、その内容を端的に表す命名をしてアセスメント視点として再構成し、9つのアセスメント視点からなる『出産体験の振り返りアセスメントツール』<sup>3)</sup>を作成した。第1主成分に含まれたアセスメント視点は肯定的な出産体験を中心とした内容であり、【出産経過中の心身の苦痛と身体感覚】【夫や家族の支え】【医療スタッフの支え】【子どもへの愛着と母親の実感】【自分の出産体験について納得する思い】の5つであった。一方、第2主成分から見出されたアセスメント視点は否定的な出産体験の内容であり、【子どもへの申し訳なさと母親の実感の欠如】【期待とのギャップで出産体験について納得できない思い】【助産師や看護師の関わりについての不満】【医師の関わりについての不満】の4つであった。信頼性の検討のためアセスメントツール28項目のCronbachの係数の算出したところ、係数は0.914であり、ツール全体の内的整合性を確認した。妥当性については、主成分分析により見出されたアセスメント視点と項目作成に使用した既存尺度の構成概念を照合し、使用尺度の内容が含まれていることを確認することで構成概念妥当性を確認した。

### 2) 研究2：出産体験の振り返りアセスメントツールの実用性の検討に向けた基礎的調査【助産師対象の質問紙調査】

出産体験を聴く、振り返りの支援をすることについてのイメージ(87記録単位、9カテゴリ)では、「出産体験の振り返りができないと育児や生活にも悪い影響が出る」「産後の心理的健康と関連する」「出産体験の振り返りにより、前向きに育児や次のステップに進むことができる」など、出産体験の母親への心理的影響や育児との関連についてのイメージが挙げられた。また、「出産の経過や思いを整理する」「出産体験を受容・意味づけする、肯定的な体験としてとらえる」「わだかまりや疑問を解消する」など、出産体験の振り返りによって得られる効果に関するイメージが挙げられた。さらに「助産師として必要なケア」とする一方で、「振り返りの支援に対する困難感や不安などのネガティブなイメージ」も挙げており、出産体験の振り返りの支援に対して困難感や苦手意識を抱えている実態が浮き彫りになった。

出産体験の振り返りの支援をする際に困ったことや難しかったこと(90記録単位、8カテゴリ)については、「出産体験の振り返りの言葉のかけ方や思いの引き出し方、環境づくり」「反応や表出の乏しい人への対応」「否定的な想いやわだかまりのある人への対応」「緊急帝王切開、母子分離、無痛分娩、死産などの具体的困難事例・場面への対応」「業務内での時間の捻出」「振り返りの支援の適任者がわからない」などが挙げられた。

出産体験の振り返りの支援について学びたいこと(86記録単位、10カテゴリ)については、「出産体験とは何か(意義などの基本的知識)」「振り返りの基本的展開方法」「思いの引き出し方や声かけの仕方」「具体的な事例を用いた実践例」「否定的な思いを持つ対象、表出の少ない対象、スタッフへの不信感を持つ対象、TOLAC希望や死産などのシビアな対象に対する支援」「スタッフ間の情報共有方法」「他の助産師や他の施設はどうしているのか」などが挙げられた。

### 3) 研究3：出産体験の振り返りアセスメントツールの実用性の検討に向けた基礎的調査【ベテ

#### ラン助産師対象の面接調査】

出産体験の振り返りの支援のコツとして、【否定的な発言に敏感となり、根拠のない称賛を与えたり、必死に励まそうとするなどして肯定的な出産体験にしようとしなさい】【自己受容を促すために、分娩経過の中で自分自身を評価できることについて尋ねる】などが見出された。また、支援する上で大切にしていることとして、【出産体験の捉え方を憶測したり、支援の進め方などのテクニックばかりを意識することなく、支援のその場で生身の反応を受けて感じたことを大切に、自らの関わりを調整していく】【否定的な評価への恐れ・不安から、むやみに励ましたり、自分のケアの振り返りが目的となってしまう得ることを認識する】などが見出された。

#### 4) 研究4：出産体験の振り返りアセスメントツールの実用性の検討に向けた基礎的調査【若手助産師対象の面接調査～パイロットスタディ～】

支援において困った・難しいと感じていることの内容として、【オープンクエスションで聴き始めても、母親が何を聴かれているのか、何を答えればよいのかわからず、あっさりと言が終わってしまう】話を掘り下げるポイントがわからない【深めるべきエピソードを覚えておいたり、話の流れや聴くタイミングを考えながら聴くのが難しく、集中して傾聴できない】【ミッシングピースは聴きだしにくい】【うまく話が聴けなかった経験をもってしまうと振り返りの支援への苦手意識を抱き、支援そのものをしなくなる可能性がある】など7カテゴリーが抽出された。ツール使用への期待として、【母親が話したい・話せる内容、掘り下げて聴くべきポイントがわかるため、導入や展開がしやすくなりそう】【母親も助産師も話す心構えや聴く心構えがしやすくなりそう】【話したい・話せることから導入して語りやすい土壌を作ってから、語りにくいミッシングピースについて自然に聴きだし展開することができそう】【振り返りを展開するために覚えておくエピソードも少なく済み、傾聴に集中できそう】【振り返りの支援における困難感が減りそうな期待感があり、成功体験をもつことができれば、支援への意識も高まりそう】の8つのカテゴリーが抽出された。

以上の成果により、出産体験の振り返りの支援を実践する際の困難や課題の実態を捉えることで、実践レベルに必要な教育的サポートについての示唆を得ることができた。出産体験の振り返りアセスメントツールは、「話したい」「話したくない」「わからない」などの5つの選択肢を設定している。この選択肢のメリットとして、話したいか否かという視点を含む選択肢を設定したことで、出産体験の振り返りの支援の必要性についてアセスメントできることに加え、母親のニーズに応じて支援のタイミングも計ることが可能、いらだちや葛藤など出産体験のわだかまりの原因ともなりうる“思い起こせない事象”の有無をとらえることは、出産体験の振り返りの支援において重要なポイントとなるため、「わからない」という選択肢により、“思い起こせない事象”の可能性をアセスメントすることが可能、という2点が挙げられる。それらの利点により、本ツールは、出産体験のメンタルヘルスケアに必要な側面を効率的にとらえてケアに活かすことができるという実用的なアセスメントツールとして有用性を備えていることが示唆された。出産体験の振り返りアセスメントツールの有用性から、本ツールの活用は看護者の振り返りの支援における困難感や課題を軽減することに貢献できると考えられる。また、出産体験の振り返りの支援方法に関する言語化された経験知は、支援の実践力を向上させる教育プログラム検討において活用できるものとする。出産体験の振り返り支援経験の少ない看護者はもちろん、出産体験の振り返りの支援に困難感を抱いている看護者は、出産体験の振り返りアセスメントツールの活用により支援における困難感を軽減し、支援の実践力を向上できる可能性が示唆された。

今後は、看護介入モデル考案に向けて、臨床助産師から得た具体的な困った場面や学びたいこと・知りたいこと、およびベテラン助産師の言語化された経験知を踏まえて、出産体験の振り返りアセスメントツールを活用する利点やコツ、注意点、具体的な困難事例における振り返り支援のポイントなどを具体的に整理し、看護介入モデルの試案を提示するとともに、支援の実践力を向上させる教育プログラムを検討していきたいと考える。

#### < 引用文献 >

- 1) 常盤洋子, 國清恭子. 出産体験の自己評価に関する研究の文献レビュー. The Kitakanto Medical Journal. 2006, 56(4), 295-302.
- 2) 國清恭子, 齋藤やよい. コントロール感覚からみた産褥想起の母親の出産体験の分析. 日本看護研究学会雑誌. 2007, 30(1), 67-77.
- 3) 國清恭子, 常盤洋子, 深澤友子. 出産体験の振り返りアセスメントツールの開発と信頼性・妥当性の検討. 母性衛生. 2021, 62(2), 372-380.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 國清恭子、常盤洋子、深澤友子	4. 巻 62(2)
2. 論文標題 出産体験の振り返りアセスメントツールの開発と信頼性・妥当性の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 母性衛生	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 國清恭子、常盤洋子、深澤友子、鈴木禎子、八巻ちひろ、吉澤実芳、島名梨沙、阿部祥子、岡田奈緒美、立木歌織
2. 発表標題 Development of an Assessment Tool for Midwives to Support Postpartum Mothers' Reflection on Their Childbirth Experiences: Selection of Assessment Items
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	常盤 洋子 (Tokiwa Yoko)  (10269334)	群馬大学・大学院保健学研究科・教授   (12301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------